

Newsletter

2012.3.1

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター



2012年度からの総合教育科目

～4月からの新カリキュラムスタートに向けて～

2012年度から総合教育科目の枠組みが大きく変わり、(1) 立教科目群、(2) 領域別科目群、(3) 主題別科目群、(4) スポーツ実習科目群の4科目群による構成となります。これらの枠組みは、立教大学の学生としての誇りと自信を育むこと、異質な他者や多様な世界のありようを尊重すること、様々なピックスを通して現実社会の変革に主体的に参加する意識を育てること、自己および他者の身体への配慮を育むこと、という4つの理念を、科目構成という形式に翻訳したものと換言できます。まずは具体的な内容を以下に紹介します。

I 新カリキュラムの枠組み

科目群・分野		卒業要件 単位数	クラスサイズ (予定)	展開コマ数	
立教科目群	立教 A (講義系)	6	150	80	
	立教 B (立教ゼミナール)		30	12	
領域別科目群	領域別 A (講義系)		150	66	
	領域別 B (文献系)		40	27	
主題別科目群	主題別 A		14	A1 (人間の探究)	54
				A2 (社会への視点)	58
		A3 (芸術・文化への招待)		40	
		A4 (心身への着目)		40	
		A5 (自然の理解)		48	
	主題別 B	150		20	
スポーツ実習 科目群	スポーツプログラム	30	-	134	
	スポーツスタディ				
合計		20	-	579 (*)	

(*) 2012年2月現在。外枠のコマ数は含まず。

(1) **立教科目群**: 2011年度までのカリキュラムにおける「立教科目」を見直し充実させた「立教A (講義系)」と、「立教生の学び方」の枠組みを原則維持した演習系の「立教B (立教ゼミナール)」で構成されています。立教A (講義系) では、宗教・人権・大学の3つのテーマを柱に、立教生としてのアイデンティティを育む科目を提供し、立教B (立教ゼミナール) では、様々な学部や学年の学生と一緒に学ぶことを通して、他者の意見を傾聴する姿勢と、自らの見解を論理的に組み立てる能力を養うことを目指します。

(2) **領域別科目群**: 他学部学生が全カリ科目として履修できるよう、各学部が提供する科目群で、「領域別A (講義系)」と「領域別B (文献系)」の2系統を柱とします。学生は所属学部の提供科目を履修することはできません。領域別A (講義系) には、他学部の学生が各学部の学問的特性に触れることのできる科目群、言い換えれば、学生にとって異質な専門性への導入となる科目群が配置されます。領域別B (文献系) には、各学部の学問分野で重要なし基礎的と見なされている文献や書物を様々な形で読み込み、その読書体験を元に、自らの思考力や表現力を高める講義系科目を配置します。

目次

2012年度からの総合教育科目 ～4月からの新カリキュラムスタートに向けて～	(1)
全カリ総合教育科目をめぐって/主題別科目群「主題別B」	平野隆文 (2)
言語教育科目 (英語) 事例紹介	鳥飼慎一郎/橋本季久代 (4)
インテンシブコース (副専攻) 言語B 修了者	佐野信子/大國 玲 (5)
出張報告	藤原 新/田中恵美 (6)
2011年度全カリ運営センターの主な活動	(7)

(3) **主題別科目群**：「主題別A」と「主題別B」で構成されます。主題別Aは、2011年度までのカリキュラムにおける「総合A」の科目を再編成し、A1 人間の探究、A2 社会への視点、A3 芸術・文化への招待、A4 心身への着目、A5 自然の理解の5つの主題別に分類、それぞれの学問分野が、現実の多様な諸課題と切り結びあうよう学びの場とします。主題別Bは、現行の「総合B」の枠組みをほぼそのまま引きつぎ、専門分野の異なる複数の担当者が、コーディネーターを中心に緊密に協力し合いながら授業を進め、1つのテーマを多角的視点から捉え、総合的にアプローチしていきます。

(4) **スポーツ実習科目群**：現行のスポーツプログラムとスポーツスタディをほぼそのまま継承し、スポーツプログラムでは様々な種目の技能習得、体力・健康の維持増進を図ると同時に、スポーツの文化的背景を学び、スポーツスタディでは、スポーツ実践に加えて全体の3分の1程度が講義形式で行われます。

II 履修登録に関する変更点

2012年度の大規模な変更点として、総合教育科目の全科目における履修登録方法が「抽選登録」になることがあげられます。また2回の抽選登録期間を経て定員に残余のある科目は、一部を除き、「科目コード登録」となります。これは、適切な授業環境を確保するために行われるもので、履修者数の適正化を図る目的があります。同時に、分野ごとの科目数の適正化にも留意しました。

III 2012年度開講科目（一部）

分野	科目名
立教A	キリスト教の歩み／平和と人権／大学と現代社会 ほか
立教B(立教ゼミナール)	(テーマ) アール・ヌーヴォーと都市／「いのち」を問う／現代の「若者」を理解する ほか
領域別A	歴史学への招待／物理学入門／政治の諸相／社会学への招待／経営学入門／異文化コミュニケーション学への招待／地域・文化研究の世界／観光学への招待／コミュニティと福祉／ウエルネスの科学／映像学への招待 ほか
領域別B	文学を読む／経済学を読む／社会学を読む／法学文献講読／経営学文献レビュー／言語研究・言語教育研究レビュー／観光の捉え方／福祉社会を考える／こころの科学基礎文庫講読／映像と身体について考える／競技スポーツの科学 等
主題別A	歴史と現代／中国語圏の社会／表象文化／スポーツの科学／都市と野鳥 ほか
主題別B	文明と文明の接点をどう読むか／オリンピック・インパクト／親密性を考える／スポーツを支える仕事 ほか
スポーツプログラム	(種目) 卓球／太極拳／セルフケア・エクササイズ／はじめてのバレエ ほか
スポーツスタディ	(種目) テニス／ダイエットフィットネス／ボディシェイプ／セルフケアエクササイズ ほか

以下は平野隆文総合教育科目構想・運営チームリーダーによる、書きおろし版全カリ履修要項の一部です。(ただし、学生に配付される『2012年度全学共通カリキュラム履修要項』には掲載されません。)

～全カリ総合教育科目をめぐって～

総合教育科目構想・運営チームリーダー／文学部教授 平野 隆文

以下は本音の挑発的科目紹介である。第1段落を読んで激怒した諸君は、精神衛生上の観点から、それ以上読むべきではない。即座にページを閉じるべし。

斉藤緑雨が喝破したように、「教育の普及は浮薄の普及」をもたらした。昔は馬が大学で学び、ロバはそれぞれ得意な分野で活躍した。それが、戦後民主主義の平等概念とともに崩れ、高校全入から大学全入までもが叫ばれ始め、雨後の筍よろしく日本全国に700以上もの「大学」が乱立した。当然、ロバにも馬並みの教育を施そうとしたが、逆に、馬までロバナみのレベルを強要される結果となった。

もはや昔に戻るは無理だから、仕方なく、戦後になってアメリカ流の教養教育を強要し、その後、各大学の裁量権が大きくなると、猫も杓子もロバレベルの教養科目を自前で作成するに至った。立教の総合教育科目は、そうした露骨な(よって自然で、かつ偽善性のない)知的区別を隠蔽する目的の下、文科省の覚えもめでたく、何度かの改変を経て今日に至っている。

こうした現実を冷徹に見据えた上で、立教大学の全カリ総合科目を敢えて否定的に紹介する(プロバガンダ用の美辞麗句は一切使わない、という意味)。

まず、立教科目群「立教A」だが、ここでは、いわゆる「自校教育」やら「建学の精神」とやらをイデオロギーの中核に据え、「宗教、人権、大学」の3テーマをア prioriに肯定した上で、「教養あるロバ(形容矛盾?)は人権主義者となるべきである」という立派な「洗脳」が行われる。「立教B(立教S)」では、「話せば分かり合える」という幼稚園並の人間認識に基づいて、「相互理解」の幻想を振りまいてくれるテーマをゼミ形式で取り上げる。話しても分かり合えない人間(集団)が存在することは、歴史を繙けば即座に分かる筈だが、そんな冷徹な現実は無視するに限らしい。

次に主題別科目群「主題別A」「主題別B」がある。Aはいわゆる「教養科目」で、「人間と社会、芸術と文化、心身への着目、自然の理解」などに関し、講義形式で行われるオーソックスな科目だが、近年、「～と平和」「多文化共生と～」「自己理解云々」「対人関係と～」などの、現代の正義や自己啓発セミナーの要素を織り込んだ、従って、社会と自己とを相対化する視点

の希薄な科目群も紛れ込んでいる。Bは1つのテーマを、3人程度の講師が、異なった専門的観点から論じ、学生と議論するタイプの「相互干渉式授業」であるが、ここにも、フェミニズムやボランティアや平和礼賛などの、自前の結論が先にありき、としか思えないような誘導式授業が潜り込んでいるから、そういうところに乗り込んで行き、教員に猛然と噛み付く度胸のある学生が、知的闘争を繰り広げる場としては適しているかもしれない。

領域別科目群の「領域別A（講義系）」（「系」とは軽薄な言い方である）とは、所属学部以外の他学部が提供する講義。「領域別B（文献系）」も、他学部の専門分野を、古典や第1級の資料の判読（繙読）を経由して、「異質な世界や思考法」を学ぶ授業である（ことになっている）。これは2012年度より新規参入した科目群である。宇宙の「ひも理論」の研究をしている者が、フィッツジェラルドに触れ、バルザックを読む者がダウ平均の何たるかを知り、樹木の被食防衛機構を卒論のテーマにした者がキリスト教とマルクス主義の相似形（教会＝共産党、終末＝世界革命、天国と地獄＝プロレタリアとブルジョア）（橋爪、大澤）に触れることは、確かに他者性に接近する営為となりうるだろう。しかし同時に、学問がロゴス（言語、国語）とそれが喚起する幻影の上に成立している側面も否めない（内田樹）、つまり、言葉による思考と伝播が、国家や平和や貨幣や宇宙や宗教や経済の非実体的存在を、逆説的に存在させる装置として機能している点では、どの学問も相似形を描いている。祖国や貨幣経済や宇宙秩序が半永久的に存在し流通し伸張するという「信仰」は（もちろんこの「信仰」はフィクションである）、ロゴスの本質的喚起力に依っているところが大きい。「存在しないもの」を存在するかの如く見せる魔術の手つきを学ぶ、という点では、領域別科目の履修は、学問的方法論自体を、懐疑の括弧にくくる作業としても評価できないわけではない。

さて、非常に乱暴に纏めれば、戦後はスポーツが武道にとって代わった。心技体を鍛える神聖なる空間を占拠していた武道は廃れ、世俗の空間を彩るスポーツの実践が、身体に付加する物理的抵抗感を経て、心身の潜在性を高め健康の維持に寄与すると信じられた。体育実技や健康の科学などと称される科目群は、そうした「健康神」への崇拜の上に構築された科目群である。世界の諺を見渡す限り、健康に勝る富はこの世には存在しない。しかし、過剰な健康イデオロギーは、極めてファシスト的で精神的に不健康でもある。そうした立地点から、禁煙ファシズム、サプリメント礼賛、アルコール忌避などを、正面から否定する勇気を持った人間は皆無に近い。そうした言説をタブー視する風潮に、異を唱える視点からも、こうした科目群は「脱構築」されるべきではないか。

教養は知識の多寡や知力の強弱を測るメジャーでは、実はない。第1に、知識（最近では「知」という軽薄な言葉を平気で使う教員が多くて困る）や知力には、生まれつきそれに向いた者と、そうではない者が存在するからである（運動神経がゼロに近い「私」に、ウサイン・ボルトと競争しろと無理強いしても意味がないのと同じである）。第2に、仮に知的アクロバシーを果たすに足る能力をもって生まれてきたとしても、そうした知的集団の中では、知識と知力は必ず他者を睥睨するための武器として、つまりは1人抜きで居るための知的虚栄心として発現せざるを得ない側面を有するからだ。頭がよくても教養を感じさせない下品な人間は、いつの世も存在するものである。

もし、「全カリ総合科目」に存在意義があるとしたら、自分には本当に知的負荷に耐える能力があるのか否か（知的運動能力の高低）を、準備体操の段階で見極める計測器として利用しうろ、という点に存するだろう。「ある」、と気付けば大学生活を続けられればよい。「ない」、と判断すれば、即座に手に職をつける選択肢を考えた方が賢明だ。戦後は「頭で考える」学校芸ばかりを教え、「直感で作る」職人芸を蔑ろにしてきた。しかし、前者の方が後者より高級だと考える根拠は何もない。

なお、講義での私語は「人権」ではない。授業は友人との待ち合わせ場所や食堂ではない。レポートなどにおける、インターネットからの「コピペ」は知的努力ではない、それどころか、剽窃すなわち犯罪である。こうしたマナーの遵守もまた、教養の重要な一部を成すことを忘れてはならない。

自校の教育を否定神学的に定義するのは、禁じ手であり、組織人として卑怯の誹りを免れないかもしれない。しかし、今回は敢えて、偽善的な美辞麗句を排除し、学生諸君を知的に挑発する方法を選んだ。1ミリたりとも信じていない宣伝文句を、組織人として擁護する文章を綴るのは、嘘をつくのと同罪だからである。嘘も方便かも知れないが、それは立教大学に取り敢えずは入学した学生諸君に、失礼千万だと考えた。この挑発に乗るも反るも、あるいは無視するも、貴方次第である。

～主題別科目群「主題別B」～

主題別科目群「主題別B」は、専門の異なる教員（およびゲスト・スピーカー）が緊密に連携し、異質な学術的方法論や、様々なスペクトルに跨る知性の色彩のパレット上で、一つのテーマを巡り、濃淡をつけつつそれを塗り上げかつ織り上げていく、いわゆる「学際的」な科目群である。ただし「学際的」とはいえ、無関係な複数の方法論が無機質に並列されるわけではなく、各専門分野が、知的集合の重なりを意識しつつ有機的に連結するよう工夫されている。従って、一つのテーマは、様々な角度から照射される異色の光の下で、新たな相貌を獲得するように設計される。授業は、学生諸君の能動的な参加を前提としているため、参加者には、専門家すら思いつかない独創的な世界の読解法を提供する気概が必要とされる（少なくとも、そうした熱気ある学生は大歓迎である）。例えば、「ホルモン料理」は、料理の専門家にとっては扱いに慎重さを要求してくる食材である。一方、法律家にとって、それは調理法や季節毎の消費方法を法的に定位すべき存在であり、食中毒の際には司法のメスが入る対象である。さらに、科学的知性にとって、それは人間を含む「消化作用」の謎を解説する一素材となろう。しかし、文学部の方法論を奉じる者にとって、テキストの中の臓物料理は、胃が胃を、腸が腸を消化する、つまり食する器官と食される器官とが、渾然一体となり、世界がカーニヴァル的な肉の溶解と統合を経験する融合現象だと把握できる。一方、人類学者や旅行記の専門家にとっては、カンニバル（人肉食）の一部を構成する一要素であり、なぜ、「人間の内臓」が「生のもので焼かれたもの」に於いては主として後者に、「女性の食物と男性の食物」にあっては主として前者に帰属するのかを分析する。さらに、イエスの肉と血に実体変化したパンとワインは、人間の内臓において、神聖な機能を果たすのか、という神学的な問いを立てることも可能である。もちろん、経済学や、資源学から、市場や世界に出回る「ホルモン」の価格変動や備蓄の調査を行う視点も見落とすべきではない。そこから、消化とは、食物とは、生命とは、というさらなる広域圏へと、知性の射程は広がっていく。要するに、主題別Bとは、学術の坩堝の中で、多様な文化的エレメントの異種交配により、さらに高次元の見地が醸成されるべき、いわば「知的な発酵」が進行する場なのである。

（以上）

【言語教育科目（英語）事例紹介】

言語副専攻（英語）開講初年度を振り返って

英語教育研究室（言語副専攻（英語）コーディネーター）／本学異文化コミュニケーション学部教授 鳥飼 慎一郎

2011年度前期より正式に言語副専攻（英語）（以後、「英語副専攻」と略す）がスタートした。英語副専攻とは、英語の必修科目単位数を2010年度より6単位にする代わりに、これまであった英語自由科目をより充実化、系統化、高度化し、必修英語カリキュラムを修了した後も学生が引き続き英語を学習し続けられるよう、学生個々人の興味、関心、必要性、専門との関わり、将来の進路などを重視しつつ、社会の多様なニーズに応えるために開発された英語カリキュラムである。

初年度となる2011年度はインディペンデント・コースとインテンシブ・コースのすべての科目、アドバンスト・コースの一部の科目が開講されたが、幸いにも学生の英語副専攻に関する関心は極めて高く、前期に向けて行なった説明会には合計で1600人近い学生が集まり、改めて立教大学における英語教育への期待の高さと、ニーズの高さを再確認することとなった。登録状況も極めて順調で、競争率（各科目の定員に対する申請者数）が10倍を超える科目が2科目、5倍～10倍の科目が8科目、2倍～5倍の科目が29科目あり、全体で78科目中70科目が定員を超える結果になった。上位コースのアドバンスト・コースを履修する学生も予想以上に多く、今年度中に同コースを修了する学生が出てくる可能性も高まったため、急きょ後期に同コースの科目を追加開講するという予想外の事態も起こった程である。

英語教育研究室では詳細なカリキュラムの分析を行うために、前期の終わりに履修者全員にアンケート調査を行った。95.7%の学生から回答を得たが、回答者の実に89.9%が必修英語カリキュラム修了後の継続学習として英語副専攻が必要であると回答している。その他の質問事項にも概ね80%前後の学生が肯定的な回答をしており、学生の満足度も高いことがうかがわれる。

極めて好調なスタートを切った英語副専攻であるが、同時に今後の課題も浮かび上がってきた。英語副専攻はあくまで自由科目の範疇にあり、学生の自発的な履修なくしては成り立たない。学生のニーズや希望と大学としての英語教育の目的をどう融合させ、立教大学としての高次元な英語カリキュラムを構築していくのが今後の大きな課題である。定員の2倍を超える科目が開講科目の半数以上にのぼることも今後解決しなければならない課題の1つである。基準点の無いインディペンデント・コースの科目は、履修者の動機づけを高める意味でもある程度の競争倍率は必要であるが、履修を希望したすべての科目が履修できなかった学生が多数存在するのは継続学習という英語副専攻の本質を考えると問題である。後期になると履修希望者数が減少すること、池袋に比べ新座の履修希望者数が少ないことなども今後改善してゆかねばならない課題である。

「英語の立教」を担うカリキュラムとして英語副専攻をさらに発展させて行くには、さらなる改革・改善が必要であることは言うまでもない。

Lecture and Discussion を履修して

異文化コミュニケーション学部3年次 橋本 季久代

(注)「言語副専攻（英語）」の科目は2010年度1年次入学者を対象として開講されており、「Lecture and Discussion」もその科目のひとつですが、2009年度以前に入学した学生も自由選択科目として履修が可能です。ただし、言語副専攻（英語）は適用されません。

今年度から自由選択科目^(注)の展開科目が増え、以前よりも充実したラインナップとなり、個々人の英語学習の目的に合わせて受講することが可能となったと感じました。私は、異文化コミュニケーション学部の所属で、ちょうど、2年次後期の半年間の語学留学を終えて迎えた新年度だったため、留学を通して身につけた英語力を維持したいという思いもあって、2011年度前期にLecture and Discussionを受講しました。この科目は、英語圏の大学に留学しても十分対応できるだけの英語コミュニケーション能力の獲得を目指すというレベル設定になっているもので、Lecture and Discussionのクラスは、留学した際、現地に着いてから直面する言語による苦勞を日本に在るうちに乗り越え、現地ですぐに学習に取り組めるようにするための英語力のベースを作ることが目的となっていました。授業では、海外の大学の教授が講演にいらした際のレクチャー映像や、海外の大学がオンライン上に載せているレクチャー映像を教材として使い、ノートのとり方や、レクチャーに頻出の単語、どういった部分が集中して聞かすべきポイントなのか、海外の大学の試験ではどのような設問が提示されるのか、それに対しどのように答えればよいのか、などといったことを学びながら、同時に、レクチャーの内容を元にグループ・ディスカッションをしたり、レクチャーを聞く毎に聞いた内容をまとめたり、海外の試験を想定した模擬テストを試してみたりもしました。学期末には、グループに分かれてインターネットから自分たちの気に入ったレクチャーを探して、その内容をまとめ、それをもとに、今度は自分たちがクラスメートに対してレクチャーを行ないました。

この科目を受講することで、リスニング力はもちろん、英語でディスカッションをする力もつくと思います。私は、留学後の受講になりましたが、留学前にこの授業を受けていたらよかったのに、と感じました。やはり、実際に留学してすぐは先生の話すスピードに付いていくことに必死で、十分にメモを取れないことも少しあったので、日本に在りながら海外でのレクチャーに備えることができるのはとても良いと思います。もちろん、留学を終えた後であっても、日本に在りながら引き続き海外のレクチャーを受けているというのも良いと思います。また、この授業を通してさまざまなトピックに触れる機会を得ることができました。コーパス言語学や、グローバルゼーション、心理学の分野からは幸福についてなど、これら以外にもさまざまなトピックを扱いました。英語力はもちろん、レクチャーというものがどのように展開されるのかといった構造的な部分や、それぞれのトピックを通して色々なことを学ぶ機会にもなり、とても充実した前期を過ごせたと思います。

そして後期は、引き続き時事英語科目を受講しており、こちらも英語でタイムリーな内容に触れることができ、日本のニュースでよく耳にする言葉は英語ではどうなっているのかなど勉強になることが多いです。

自分にあったレベルや目的に合わせて受講することができるのが英語自由選択科目の魅力だと思います。

【インテンシブコース（副専攻）言語B修了者】

2011年度は、インテンシブコース（副専攻）で、ドイツ語とスペイン語の修了者が誕生しました。本号では、この2名の修了者を紹介します。

インテンシブコースって何？

文学部文学科英米文学専修4年次（インテンシブコース（副専攻）ドイツ語第1号修了者） 佐野 信子

私がドイツ語のインテンシブコースを受けている、と言うと、返ってくる第一声はほぼこの言葉でした。インテンシブコース（副専攻）という存在は、私の周りではほとんど知られていませんでした。かく言う私も、2年間の必修単位を修了した後、ドイツへ1ヵ月間語学留学をしようと思うまで、その存在は「そんなのあったような気がしないでもない」というほどしかありませんでした。1ヶ月の留学を決めたのは、2年間ドイツ語を学んでいるうちに、ドイツに実際に行ってみたくてという好奇心が芽生えたからでしたが、更に語学力を高めてからの方が現地へ行って学び取れることも多いと思いました。そこで、3年目からも続けて受講できるドイツ語の講義を探したところ、「インテンシブコース」を見つけたのです。「明確な目標があれば、頑張れる。」そう思い、インテンシブコースに進みました。

実際、インテンシブコースを受講したおかげで、私の大学生活はかなり有意義なものとなりました。語学力の向上という面はもちろんですが、何より、人との出会いが最も大きな実りであったと思います。ドイツ語を通して、実に様々な方と出会うことができました。それはドイツ人であったり、日本人であったり、韓国人であったり、スウェーデン人であったり、年齢も境遇もさまざまでした。私がドイツ語を学んでいて思ったことは、同じ日本人でも、第二言語を学んでいる人は、視野の広い人ばかりだということです。それは好奇心の強さからだと思います。

日系企業の社内英語公用語化などが最近何かと話題になり、英語の必要不可欠感は高まっています。就職のためにTOEICの勉強をしなくては、という気持ちになるのは当然のことです。私もそうでした。英語を学ぶ私も、義務感のようなものを感じていたのかもしれませんが、しかし、ドイツ語は、良くも悪くも必要性に駆られることはありませんでした。だからこそ、純粋に語学を学ぶ楽しさを再確認できたのだと思います。そして、ただ楽しむだけでなく、インテンシブコースという目標があったおかげで、ドイツ語力を向上させることができました。

私は、就職のためにドイツ語を勉強していたわけでは一切ありませんでした。しかし、就職活動をする上で、ドイツ系企業に興味を持つきっかけになったり、ドイツ語採用を受けることができたり、ドイツ語を学んだことは、自然と私の選択肢を増やしていました。

だからこそ、未来の後輩たちにも、言語Bとして選択した言語を1年、あるいは2年間の必修単位の取得のためだけに学ぶのではなく、好奇心を持ち、純粋に未知の言語や文化を知ることを楽しんでほしいと思います。大学には、インテンシブコースのような、大学生活が更に豊かになるようなカリキュラムがあります。それを活用し、大学生活をより実りある、確かなものにしてほしいです。

インテンシブコース（副専攻）を修了して

文学部史学科4年次（インテンシブコース（副専攻）スペイン語第1号修了者） 大國 玲

言語を学ぶ、ということは新たな視点の獲得のための重要な一歩だと思います。

私も含め、多くの学生にとって「言葉がわかる」ということはそのまま研究対象の選択肢の拡大やそれへの理解の深化に直結します。私のインテンシブコース履修の動機もそこにありました。私は史学科の所属ですが、インテンシブコースの受講はそれだけではなく現在のニュースに関心を払うきっかけをももたらしてくれたと思います。

最初に履修したクラスでは映画を字幕なしのスペイン語音声のみで鑑賞し、聞き取ったセリフや語句を使って作品内容を要約するという作業を行いました。私は聞き取れた単語があまりに少なかったため、スペイン語で書かれた作品情報をインターネットで検索し直さなければならませんでした。しかしこのおかげでアルファベットの羅列を見ても嫌気がさすことがなくなったのだと思います。それに加えて作品主題や制作、社会背景にも関心を払うようになり、web-periodicoをフォローしたり、通学前にはワールドニュースを欠かさず見るようになったりしました。なぜ社会学系の学部に入らなかったのかと悔いたこともあったほどです。今でも辞書は手放せませんが、研究を進めるにあたって概説書や研究書、論文などでスペイン語文献を多く利用できたことは、スペインの中世史（アンダルス史）を扱うことを多少なりとも易しくしてくれました。

ところで、スペイン人の気質についてよく「陽気で情熱的」と言われています。しかし、スペイン出身の先生方を見ても、また実際に現地へ行って話してみた印象からも、「お国柄」を個人の性質や関係に持ち込むことの無意味さを改めて強く感じました。以前知り合ったイスラエル人のほうが彼ら「スペイン人」よりもよっぽど陽気で、言語の壁を感じさせないくらい常に笑わせてくれる人間だったと感じることもありましたが、それに「日本人は奥ゆかしい」—実際に自分の友人がそんな人間ばかりなのかと言ったら全く違います。スペインを旅行中、街を一人でふらふら歩いているときに声をかけてくださる方（お店の客引きではなく）がいたり、観光地で小学生に「コニチハー！」と大声で挨拶されたりしましたが、それは日本でも外国人に対してよくある光景ではないかと思いました。空気や匂いといった部分は、もちろん現地に行かないとわからないことですし、言葉を知るといっても言語集団の文化背景や思想体系を垣間見る手段ではありません。その差異を求めたりそれに甘えることは容易ですが、そのような枠にとらわれることなく個々人の性質を理解する手段としても語学の学習は意味のあるものだと感じました。



〔修了証授与式にて〕写真左から
新野言語チームリーダー、大國さん、佐野さん、青木全カリ部長

【出張報告】

「大学教育学会 2011 年度課題研究集会」参加報告

全学共通カリキュラム運営センター副部長／本学経済学部准教授 藤原 新

2011 年 11 月 26 日から 27 日に山形市中央公民館で開催された「大学教育学会」2011 年度課題研究集会「大学教育の原点—授業・学生・教養」に参加した。震災から 8 カ月が経過し、物理的な意味では会場周辺でその影響を直接感じることはなかったが、報告や討論の背後に「復興を担う世代をどう育てるか」という意識が強く感じられる集会となった。

1 日目は基調講演の後、「学生主体型授業の可能性」というテーマでシンポジウムが開かれた。これは山形大学の杉原真晃会員による「学生主体型授業をもとにした教員主体型 FD の構築」、北海道医療大学の岡部和厚会員による「学生主体授業「メディカルカフェを作る」の 2 本の報告と討論という内容であった。

近年、「社会人基礎力」、とくに、「積極性」、「コミュニケーション能力」を大学教育の主要な目的の一つとするよう求められてきている。このシンポジウムの課題は、この「社会人基礎力」を高める手段として、学生が授業の企画や運営に深く関与する「学生主体型授業」の実践例を共有し、その成果や課題を確認することにあった。

第一の杉原報告では 3 名の専門の異なる専任教員が共同で行うセミナー型授業の実践が紹介された。授業の内容や作りは本学の総合 B 科目に似た性格を持つものであり、私たちにとってとくに目新しいものではなかった。ただ、多様な分野の教員が参加する「汎用的な」学生参加型授業をまず小規模に展開し、その経験を全学で共有して、さらに、それぞれの専門領域での独自の工夫を加えることで学生参加型授業を全学展開するという段階的・計画的な FD の仕組みを構築している点は、本学の FD 活動にとっても示唆を与えるものではないかと思われる。

第二の岡部報告では、「メディカルカフェ」という学外イベントを企画・運営するという授業実践が紹介された。イベントを自らの手で企画・運営することで、学生の成長を促す狙いがある。この授業では、教員はアドバイザーとしての役割のみを担うにすぎず、「学生主体」が貫かれている。この授業を通じて、学生の企画力や行動力、コミュニケーション能力や責任感といった「社会人基礎力」が飛躍的に高まることが報告された。

本学においては、このような活動はこれまで主として学生の自主的な正課外活動によってなされ、多くの成果を上げてきている。「社会人基礎力」の涵養は正課のみで完結するものではない。討論においてもメディカルカフェの活動をあえて正課として展開する意味についての問題提起があったが、議論は必ずしも十分に煮詰められなかった。

当初は、さらに富山大学の橋本勝会員によって、「学生参加型授業」の実践が報告される予定だった。これは 268 名の大人数授業での討論型「学生参加型授業」の実践報告であり、本学のとくに全カリにとって非常に興味深い報告となるはずだったが、報告者の体調不良で取りやめとなった。大規模授業の改善は全カリの課題の一つであり、今後、この実践に注目していきたい。

リンク

全学共通カリキュラム事務室課員／本学職員 田中 恵美

本稿では、主に大学教育学会 2011 年度課題研究集会の 2 日目、11 月 27 日に開催された 2 つのシンポジウムについて報告する。そういえば、課題研究集会と同じ日程でフィギュアスケートの世界大会、グランプリシリーズロシア大会が開催されていた。日本からは、あの浅田真央選手も参加していた。言わずと知れた、女子フィギュアスケートのスター選手の一人であるが、ご多分に漏れず、私も彼女のファンなので開催を楽しみにしていた。

さて、いきなり話が脱線したが、大綱化以降のこの 20 年、各大学は FD・SD を含め様々な取り組みを行ってきたが、一方で、学位授与方針等の策定、成績評価やシラバスの厳正化などへの個別的な対応策に終始し、課題の部分的な切り取りのみに夢中になっているとも指摘されている。

このような現状を踏まえ、シンポジウムⅠ〈実践的な教養教育を求めて〉の中では、木本尚美氏（県立広島大学）より全国の 4 年制大学の学部長を対象に行った共通教育への意識調査の報告があった。回答した多くの大学では、教養教育を担う組織が不安定で、責任の所在が明らかでないこと、専門教育との連携が図られていないことが課題として認識されているとのことであった。木本氏は、「誰が」共通教育をデザイン・マネジメント・リードするのかということを確認し、「職業人養成」のみにとどまらない共通教育の目標を全学で共有するために、共通教育のディプロマポリシーを設定すべきであるとこの提言を行った。

続いて、シンポジウムⅡ〈学生支援で学生はどのように変容しうるか—ボランティア活動支援から—〉では、兵頭智佳氏（早稲田大学）より WAVOC（早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター）の活動報告があった。WAVOC では「ふりかえり」を重視し、ボランティア活動を通して体験した「言葉にならない感情」を「言葉にする」、「非日常」であるボランティア活動を「日常」に落とし込む、という訓練を繰り返しているとの報告があった。兵頭氏によれば、学生たちには、WAVOC の活動を通して得た関心を履修や進路選択に反映させる現象がみられ、様々な関心を授業や研究にリンクさせることができるようになるという。兵頭氏は、それこそが大学でボランティア活動を支援する大きな意義である、との見解を示した。

シンポジウムⅠでは、全国の大学で専門と教養のリンケージが十分でないことが、大きな課題として認識されていることが明らかになったが、全国の大学がこのような状況にある中で、2012 年度からの総合教育科目の改革が全国に先駆けた注目すべき試みとなることは言うまでもない。また、共通教育のディプロマポリシーを策定すべきという提言について、その効果と実現可能性には不透明な部分が多いにしろ、このシンポジウムが「学位授与方針等の策定が学部・学科ごとに行われた結果、「学士力」も細分化され、結果として共通教育が「学士力」から取り除かれてしまう現象」が起きているという問題を提起したことは、非常に有意義であった。

シンポジウムⅡからは、学生が正課外での学びを正課や進路選択へリンクさせることができるという報告があり、他分野の横断的な学びこそ大学の醍醐味であることを改めて実感できた。

帰宅後、スポーツニュースで浅田選手がグランプリシリーズロシア大会で優勝したことを知った。

調子がいい時も悪いときも浅田選手を支えるスケートリンクのように、専門と教養、正課外と正課、教員と職員の「リンク」が、とすれば縦割りになりがちな大学教育の基盤となるのだということを、今回の課題研究集会で再確認することができた。

2011年度全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

* 2012年2月までの情報。3月開催分は全て予定です。

〈言語教育科目構想・運営チーム〉

①英語教育研究室

- ・4月16日(土) 新任オリエンテーション
(池) 8号館 8202教室 10:00～12:00
- ・4月16日(土) 前期FDセミナー
(池) 8号館 8202教室 13:00～15:30
- ・7月8日(金)～21日(木) 前期言語副専攻(英語) アンケート実施
実施枚数:1647枚
- ・12月10日(土) 第12回大柴杯スピーチコンテスト開催
(池) 5号館 5121教室
- ・12月17日(土) 後期FDセミナー
(池) 5号館 5125教室 13:00～16:00
- ・12月19日(月)～22日(木)、1月6日(金)～24日(火)
後期言語副専攻(英語) アンケート実施
実施枚数:1985枚
後期英語カリキュラムアンケート実施
実施クラス数:234クラス
- ・英語ウェブテスト(GTEC)実施
1年次対象:4月期(プレイスメントテスト)、9月期(前期末)、1月期(後期末)、2月の指定された期間
2～4年次対象:8月末～9月上旬、1月末～2月下旬の指定された期間

②ドイツ語教育研究室

- ・7月22日(金) 前期担当者連絡会
(池) 11号館 A101教室 16:30～18:00
- ・2月16日(木) 後期担当者連絡会
(池) 10号館 X108教室 16:30～18:00

③フランス語教育研究室

- ・7月6日(金) 前期担当者連絡会
(池) マキムホール 第1・2会議室
16:30～18:00
- ・12月17日(土) 後期担当者連絡会
(池) 14号館 D302教室 16:00～20:00

④スペイン語教育研究室

- ・7月27日(水) 前期担当者連絡会
(池) マキムホール 第3会議室
18:30～21:00
- ・2月1日(水) 後期担当者連絡会
(池) マキムホール 第1会議室
18:30～21:00

⑤中国語教育研究室

- ・7月30日(土) 前期担当者連絡会
(池) マキムホール 第1・2会議室
15:00～16:30
- ・1月28日(土) 後期担当者連絡会
(池) マキムホール 第1・2会議室
15:00～17:30

⑥諸言語教育研究室

- ・7月22日(木) 前期担当者連絡会(朝鮮語)
(池) タッカーホール 会議室
17:00～19:30
- ・1月25日(水) 後期担当者連絡会(朝鮮語)
(池) ミッチェル館 会議室
17:00～19:00

⑦日本語教育研究室

- ・4月15日(金) 専任・教育講師打ち合わせ
(池) マキムホール 第1会議室
13:00～15:00
- ・4月27日(水) 専任・教育講師打ち合わせ
(池) マキムホール内研究室 17:30～18:30
- ・3月 後期担当者連絡会(学部科目担当者)
- ・3月 後期担当者連絡会(特外科目担当者)

⑧ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語共通

- ・12月12日(月)～16日(金) 言語B副専攻アンケート実施
実施クラス数:104クラス

〈総合教育科目構想・運営チーム〉

- ・2月24日(金) 2012年度第1回担当者連絡会
(池) 11号館3階 A301教室 17:00～19:00

〈新任教員対象オリエンテーション〉

- ・4月7日(木)・8日(金)
人事課主催新任教員オリエンテーション
「全カリについて」の説明：青木康全カリ部長
- ・3月31日(土)
ランゲージ・センター主催オリエンテーション(新任教育講師対象)
新野守広言語教育科目構想・運営チームリーダー出席

〈授業評価アンケート関連〉

①言語教育科目構想・運営チーム

【2011年度「授業評価アンケート」関連】

- ・全カリ言語教育科目「授業評価アンケート」実施(2011年度後期科目対象)
12月19日(月)～22日(木)、1月6日(金)～24日(火) 実施科目数：237科目

【「授業評価アンケート報告書」関連】

- ・「全学共通カリキュラム言語教育科目授業評価アンケート」(2010年度後期実施分)作成(2011年12月刊行)

②総合教育科目構想・運営チーム

【2010年度「学生による授業評価アンケート」関連】

- ・2010年度「学生による授業評価アンケート」学部等総評の作成

【2011年度「学生による授業評価アンケート」関連】

- ・2011年度「学生による授業評価アンケート実施」(後期のみ)
実施科目数：132科目

〈全カリシンポジウム〉

テーマ：「専門と教養の間で～領域別科目を中心に～」

日時：2011年11月10日(木) 18:20～20:30

池袋キャンパス 太刀川記念館多目的ホール

プログラム：

◆発題者

平野隆文(本学文学部教授、全学共通カリキュラム運営センター総合教育科目構想・運営チームリーダー)

◆発言者

【人文系】西原廉太(本学文学部教授)

【自然系】家城和夫(本学理学部教授)

【社会系】小川有美(本学法学部教授)

◆質疑応答・討論

司会：中島俊克(本学経済学部教授、全学共通カリキュラム運営センター総合教育科目構想・運営チームメンバー)

コメンテーター：寺崎昌男(本学総長室調査役)



*本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム第17号」(2012年3月発行予定)に掲載

〈学外対応〉

- ・6月7日(火) 文京学院大学来学
「全カリ言語教育科目カリキュラムおよび運営体制」
- ・7月8日(金) 吉備国際大学来学
「全カリのカリキュラムおよび組織運営」

〈学会・シンポジウム参加〉

- ・11月26日(土)・27日(日)
大学教育学会2011年度課題研究集会「大学教育の原点—授業・学生・教養」参加
藤原新(全カリ副部長)、藤野裕介・田中恵美(全カリ事務室課員)

*学会参加についての報告は、本誌 p.6 に掲載

全カリニュースレター No.31

印刷 2012.2.22 発行 2012.3.1
 発行人 青木 康
 編集人 石坂 浩一、平野 隆文
 発行所 立教大学
 全学共通カリキュラム運営センター
 印刷 株式会社 プリントボーイ